

平成26年度研究助成 【音楽振興部門】より

伝統的な歌唱を稽古する子どもの歌い方の分析 —学校教育における歌唱モデルの構築に向けて—



静岡大学 教育学部
助教

長谷川 慎



静岡大学 教育学部
教授

志民 一成

平成20年に改訂された現行の学習指導要領（小・中学校）においても、我が国の伝統的な歌唱の取扱いは改訂の柱と位置付けられており、現在の学校音楽教育において、とくに注目されている今日的な課題である。本研究は、その日本の伝統的な歌唱の稽古を受けている子どもの唄い方について、発声やコブシ、唄う高さ（調子）を分析し、学校教育において子どもが伝統的な歌唱を唄う際のモデルを構築していくことを目的としている。

前述の通り、学習指導要領において我が国の伝統的な歌唱の取扱いが重視されてきているものの、未だ実践例は極めて少ない。その原因としては、高度に完成された芸である伝統的な歌唱を、子どもにどう教授していくべきかについて、十分に検討されてきておらず、当然ながら、どう評価すべきなのかも明確にされていないということが考えられる。「模範演奏」として示される鑑賞CD・DVDなどは、いずれも完成された名人の高度な芸（歌唱）がほとんどである。

そこで本研究では、子どもの学習者、特に能の謡や、長唄や箏曲等の近世邦楽、民謡などの伝統的な歌唱の稽古を受けている子ども（小・中学生）の音声を収集し、(1) 発声や唄う高さ（調子）、(2) 唄い方などについて音響分析を行い、(3) 伝統芸能の学習の場（お稽古）での小・中学生の唄い方はどうなっているのか、(4) どのように唄うことで指導者はよし悪しを認めているのかを調査し、学校教育における伝統的な歌唱のモデル構築を目指している。なお、音響分析にはスペクトログラムやピッチ検出、パワー測定などを用い、表声や裏声の使い分けやフォルマントなど声の音色の特徴についても検討している。さらには、またコブシや節回しなどの唄い方については楽譜化するなどし、大人の歌唱との比較を行う。

これらの分析をもとに、小・中学校で日本の伝統的な歌唱を扱う際に、①どのような高さ（調子）で導入したらよいか、また、②どのような発声を目指したらよいか、さらには、③コブシなどの装飾的な旋律をどう扱えば良い

か等について、具体的な指標を示していく。これら①から③について、モデルを提示することが本研究の成果として想定される。これにより、子どもの発達段階や成長の実態に即した歌唱指導が可能となり、また、具体的なモデルが示されることで、子どもにとって身近な模範となるばかりでなく、教師にとっても指導の目標が具体化され、さらには評価の規準の明確化にもつながることが期待される。それによって小・中学校で日本の伝統的な歌唱の活動が、より活発に行われるようになり、その質の向上にもつながると考えている。

本研究は、日本の伝統音楽の稽古の現場での子どもの声の音声データ収集および分析を基として、学校教育で日本の伝統的な歌唱を扱う際



図1 静岡大学附属静岡小学校での民謡授業
『こきりこ』節（平成26年10月16日）

の具体的な指導モデルの構築に集約される。従って国外はもとより国内でも先行研究例は少なく、日本の伝統音楽における稽古の現場で行われている指導を調査し、そこから学校教育にフィードバックする研究はこれまで行われていないことから、画期的な研究となることを願って取り組んでいる。

現在の研究進捗状況としては、民謡を唄う子ども（小学4年生）の歌唱モデルの録音・録画、箏曲を学習する子ども（中学3年生）の歌唱モデルの録音・録画を行っている。民謡の歌唱モデルとした子どもは、静岡市在住の民謡家元・杉山孝雄師のもとで民謡を学び、昨年6月に行われた第27回ちゃっきり節日本一全国大会で優勝した女兒である。大学のスタジオに招き収録をしたのであるが、子どもと思えないその歌唱力の高さに感動した次第である。早速、DVD化をして静岡大学附属浜松小学校を始めとして志民が研究協力者をつとめる県内小学校での民謡の授業に用いた。実施校の子どもたちは、同世代の子どもが唄うソーラン節やちゃっきり節を鑑賞し、どうしたらモデルのような声や唄い方になるのかを具体的に理解できた子どもたちが多くみられた。また、女兒からのビデオメッセージとして、経験に基づく分かりやすく具体的な学習のポイントが示されたことで、そうした唄い方の習得に積極的にチャレンジする姿が見受けられた。

一方、箏曲の収録に協力いただいた中学3年生の男子生徒は、これまで多くのコンクールで第1位を獲得するなど大変優秀な生徒であり、歌唱モデルとしてだけでなく器楽「箏」の演奏モデルともなると考えている。今後は、箏曲についても民謡同様にDVD化をしていくとともに、長唄を学ぶ歌舞伎俳優の子弟への調査、能楽を学ぶ能楽師の子弟への調査を行い、長唄と能楽についての伝統的歌唱の音源・映像の記録を行う予定である。取材対象者は

都内在住者が多く、財団の助成金は都内への交通費補助に多いに役立っている。また、子どもと保護者、場合によっては師匠をともなって静岡大学に来ていただく場合の交通費や謝金としても大助かりである。

なお、財団の助成金は資金の管理に制約がないということではあるが、私たちの場合は、静岡大学の「静岡大学研究費等管理規則」に則って適正な支出を行っていることを申し添えてこの稿を終わりとす。